

定年退職にあたって ～コミュニティ福祉とは何か～

坂田 周一

(コミュニティ政策学科教員)

大学院を修了して大学教員になったのは28歳の時でした。今回、65歳となり定年退職を迎えますので、通算37年間の教員生活であったこととなります。そのうちの約半分、18年間はコミュニティ福祉学部で過ごしました。長い年月を大過なく勤務することができたのは、学生の皆様、同僚教員の皆様、そして事務部や協力会社の勤務員の皆様が親切にしてくださったおかげであると感謝しております。何かと忙しい日々でしたが、学部長や副総長の務めが終わったあとは余裕ができ、「新座犬猫里親会」からの養子犬であるリリーを研究室に連れてくるのがしばしばありました。そのことを含めて、いろいろとご迷惑をおかけしたことについて、お詫び申し上げたいと思います。

そうした安寧のなかにあっても、この学部を志望し、入学し、学び、そして卒業していく学生の皆様が、この学部をどのようなものとして理解し、他者に説明することができるのだろうか、というテーマを折に触れて考えては、その答えを見出すのに悩むこともありました。ここでは、現段階での私の理解を申し上げておきたいと思います。

「コミュニティ福祉」とは何でしょうか。この学部の設置申請にあたって文部省(当時)に提出された「学部設置の趣旨」^(註)という文章があります。この文章の中には、コミュニティ福祉が「地域福祉」を指すと受け取れる記述がなされている箇所もありますが、一方では、より根本的な社会原理に関わる記述がなされていることにも気がつきます。例えば、「福祉の実現を市民社会の側から目指すという福祉社会の理念を具体化するための基礎として、コミュニティを位置づけている」というくだりは、社会原理に関わる記述であるといえましょう。

この文の前段では福祉の理念が市民社会と関連付けて述べられ、後段ではコミュニティを通じてその理念が具体化されると述べられています。市民社会のもつ多様な意味の一つに、人権に基づく近代社会の構成原理としての意味がありますが、ここではその市民社会とコミュニティが密接に関連付けられ、かつ互換的にさえ用いられています。

そのことは、人間の福祉の在り方を近代の視点から考察するといった広大なテーマへの扉を開く鍵として、コミュニティを位置づけようとする意図があったものと受け止めることができるでしょう。この学部がスタートした1998年度当初の専任教員の中に、臨床心理学やキリスト教学などの人文的領域を専門とする教員が社会福祉学専攻教員に匹敵する数で含まれていたのは、そうした人間的課題の広がりや深さに対応するためであったからでしょう。

しかし、その後、新座に現代心理学部が設置されるとか、池袋にキリスト教学研究科が創設されるなどの大学全体の改編計画の影響を受けて、学部の再構築が必要になりました。「福祉」と並ぶこの学部のもうひとつの主題である「市民社会」に関する教育研究を充実させる方向が選択され、新たに社会学、政治学、行政学、経済学、社会開発論、社会調査論等の先生方に専任教員としてご参加いただき、そこに従来からの教員の一部が合流して2006年4月に、「コミュニティ政策学科」がつけられました。コミュニティは、福祉と市民社会の両方を包含し統合する概念と考えられたのです。その後も大学全体の改編が続き、「スポーツウエルネス学科」がこの学部の中に設置されたのは2008年4月のことでした。

この流れの中で、コミュニティ福祉は、より一層の広がりを持つことになりました。とはいえ、一般には、福祉はより限定的にとらえられる傾向がありますから、新学科が「福祉」の名の下に統合されていることは、直ちには理解されにくい面があることは否めません。例えば、アメリカでは生活困窮者に支援金を支給する制度をさして「福祉」が用いられることが多くなっています。日本では、学生のリアクションペーパーなどを読むと、「介護」をイメージする人が多いようです。福祉はそのように、狭義に理解されがちな面がありますから、コミュニティ政策やスポーツウエルネスと福祉との関連性については、一定の説明がなされる必要があります。

まず、「福祉」という言葉ですが、中国古代の漢字の源流をたどってみると「福」も「祉」も祭卓を形象する「示」（しめすへん）を持つことから、神の恵みである「幸福」を指す象形文字であったとされています。このような意味で福祉をとらえ直すなら、生活のあらゆる領域を包含する言葉であることがわかり、この学部の内実と矛盾しないことに気が付くのではないのでしょうか。つまり、コミュニティ福祉における「福祉」は第一義的には、「目的としての福祉」を意味しています。「手段としての福祉」から区別するために、近年では、「ウエルビーイング」と表記されることが多くなりました。「ウエルビーイングとは、人間が社会のなかで自分らしく充実した生き方を送るために必要となる諸ニーズが満たされている状態」と言えますが、この定義に出てくる「ニーズ」を、「コミュニティ」や「市民社会」と並ぶこの学部の共通の基礎概念に加えることを提案

したいと思います。

ニードとは何か。その定義をめぐるのは、人間の本質をめぐる古来の哲学にまで遡る議論もなされるほどに奥深い面があり、諸理論が提起されていますが、それらのどの論議においても、人間にとって最も基本的なニードが「健康」であることは共通しています。

スポーツウエルネス学科は、福祉の基本である健康をキーワードとして設置されました。「スポーツ」の後に「ウエルネス」が続いていることにその意味が集約されています。オリンピック選手を育てるような、スポーツの能力を極限まで高めることもさることながら、人間の幸福にとって基本的に重要な健康のニードを、個々人の個性を引き出しつつ、その人らしく充足するという側面に、より重点を置いた学科であることが、設置の趣旨に表明されておりました。

健康の定義にも論争的な面はありますが、基本的に健康と福祉はイコールといえるでしょう。健康を維持し増進するための生活習慣には、栄養、運動、休養などに関わる行動諸系列が関連しますが、それらは個人が単独で取り組むよりも複数の人間が相互関係をもって取り組む方がより有効であるという、ソーシャルキャピタルの作用を示す事例が数多く報告されています。そういった具体的な方法論を通じて、スポーツからのコミュニティへのアプローチが見えてくることでしょう。

健康と同等に重要なことは、社会に参加して自由に意見を述べ、その社会に貢献できること、そのような「市民社会的オートノミー（自律性）」を人間が実質的に保持していることです。市民社会はもともと王権や国家権力から解放された社会を意味しますが、それが内実をもったものとなるためには、自分の属する社会、すなわちコミュニティそのものが、主権者であるコミュニティ成員の参加によって形成され、律されていることが重要です。そのためには、どのような手立てや仕組みが必要になるでしょうか。コミュニティ政策学科は、そうした市民社会を希求する人間のニードを充足しうる社会組織のありかたを追究する学科であると言えるでしょう。

そのうえで、子ども、しょうがい者、高齢者、生活困窮者、そして社会的排除を受けて多様な苦難の中にある当事者とその家族に目を向け、それらの人びとがコミュニティのメンバーとして当然に受けられるべき支援とは何なのか、またその支援を十分に展開し、かつ発展させること、すなわちシティズンシップの享受と充実、そして、脆弱であるがゆえに侵害されがちなそれらの人びとの諸権利を擁護するための方法論と具体的な取り組みを追究する、それが福祉学科の使命であると考えています。

以上に述べたことをまとめると、「コミュニティ福祉とは、人権保障のために国家社会がなす諸施策を前提とし、それらとともに、コミュニティのもつ力を活用し、かつ、

コミュニティにおける諸活動に積極的に関わりをもち、それらの諸活動によって形成されるシステムを通じて実現される福祉の状態である」と考えています。

私は、学部共通の必修科目であるオムニバス授業「コミュニティ福祉学入門」の自分の担当回では、学部アイデンティティ形成の一助になればとの思いから、ここに記したような内容のことを、特にスポーツウエルネス学科の新入生を念頭に置いた具体例を用いて話しをしてきました。福祉を狭くとらえている限りは、スポーツと福祉のつながりを理解するのは難しく、この学部で学ぶ意味を見出せなくなるのではないかと恐れたからです。しかし、諸般の事情により、この科目は2016年度から、学部共通の必修科目ではなくなることになりました。このため、コミュニティ福祉学における諸学の統合の論理を掘り下げ共有するための、新たな仕組みづくりが課題とされなければなりません。学生目線に立ち、すべての学生が自分の所属学科のみならず所属学部の意義を理解し、他人に説明できる教育が真に行われているかどうか、その点検が不断になされることを祈って、定年退職のご挨拶に代えさせていただきます。

終わりに当たって一言。個人的なことになりますが、私が皆さんと同じ学生であったころ、とりわけ博士課程に進学してからは、進路の悩み、先の見えない不安に襲われることがありました。そんなある日のこと、三浦文夫先生から、「君の研究を社会保障研究所で発表し、そこでの質疑を踏まえて、論文にまとめなさい」とのお話がありました。後年の博士論文の原型となったその論文は、『季刊社会保障研究』に掲載されました。このとき私は、迷いを捨ててこの道で頑張ろうと心に決めました。それから40年近くが過ぎ、来年は米寿祝いしようと思っていた矢先の今年の8月、病気のため先生は満86歳でお亡くなりになりました。この場を借りて、お礼を申し上げ、ご冥福を祈りたいと思います。学生の皆様も、いま学んでいる事柄や周りの人びととの交流の中に、自分の一生の在り方につながるものを発見なさることでしょう。そうであることを強く願って、「ボンボヤージュ」、「グッドラック」と申し上げたいと思います。

(注) コミュニティ福祉学部設置にあたり、文部省（当時）に提出された「学部設置の趣旨」は、福山清蔵「コミュニティ福祉学部の構想」『コミュニティ福祉学部紀要』創刊号,1999年に掲載されています。